

平成27年度 算数・数学教育研究部会（読書会）報告

第5回

平成27年10月7日（水） 午後6時00分～ 総合学習センター

『教育研究論文の書き方』

講師 井田小学校教務主任 塚谷 保 先生

●『教育論文のまとめ方』 講師 井田小学校教務主任 塚谷 保 先生

1 なぜ、論文を書くのか

- (1) 授業が変わる・・・論文を書く前提で授業をするときは、子どもをとらえるところから始まる。よって、子どもへの願いを明確にした上で授業をスタートすることができる。また、意図的な教師支援ができるようになる。さらに、子どもたちの実態に合わせて修正しながら展開することができる。
- (2) 書くことで見えてくる自分に気づく・・・成果を明らかにすることができる一方、授業の難しさ、勉強不足、とらえの甘さを自覚することができる。また、自分なりの理論を確立することができる。結果、自信をもって子どもたちの指導に当たることができる。
- (3) 子どものための実践となる・・・実践は子どものために行われる意図的なものでなくてはならない。子どもの成長を夢見て、自分の取り組みをまとめて、成果を確認できる。

2 実践をまとめるにあたって

- (1) まず一歩踏み出すこと
 - ・ 先輩や同僚と子どもの姿について話し合う。
 - ・ 先人の記録を読んで真似をする。
 - ・ とにかく書きはじめる。
- (2) 子どもの成長を探り、記録（資料）を集めておく
 - ・ 授業記録、学習記録、ノート、日記、作品、写真、教師メモ、対話記録、ビデオなどのあらゆる事実を集積しておく。
 - ・ 子どもが表情に出した背景も探しておく。
- (3) 難しいという先入観を捨てる
 - ・ その教師やその子どもでなければできない授業であるので、記録として残す。
 - ・ うまくいかなかったことも自分の貴重な資料となる。



3 教育研究論文に求められるもの

- (1) 教師としての在り方
 - ① 実践にかける熱意があふれている。

子どもにかける願いや目指す子どもの姿を具体化していく。研究のための研究、論文を書くための実践ではなく、子どもの成長を願う教師の強い思いが根底にあること。また、教師自らが苦悩や失敗を繰り返しての試行錯誤がにじみ出ている。
 - ② 子どもから学ぶ姿勢を大切にしている。

子どもとともに歩む姿や子どものよさを引き出そうとする姿がある。
 - ③ 根底に人間教育の姿勢が流れている。

知識理解や技能習得のみを問題にするのではなく、実践を通して子どもの人間としての成長を願う。また、子ども自らが生活を見直したり、新たな対象を求めて動き出したりする姿を求める。

(2) 論述の仕方において

① 子どもの成長過程をきめ細かく追跡している。

記録の累積、分析、整理（教師メモ・生活記録・授業記録・座席表・写真・学習記録）などを、単元に入る前、単元の中で、単元を通して行い、授業以外の面（生活や家庭）にも目を向ける。

② 論点が明確である。

総括的な実践報告ではなく、中心になる部分を書き込まれていることが大切であるので、手立てが多すぎて検証しきれないようなことがないように注意する。また、抽出児を位置づけ、その生徒の変容を中心とする。

③ 資料を活かした論証がされている。

資料の役割と位置づけを明確にし、不必要な資料は貼付しない。また、検証は子どもの姿や意識が表れた資料をもとに考察し、教師の主観に陥らないようする。

(3) 教育研究論文を書くための準備

① 研究テーマをもとにした単元構想

目指す子ども像や目指す授業像をはっきりとさせ、それに合った手立てを明らかにする。目の前の子どもたちから出発するので、子どもたちの実態をつかみ、子どもに対する願いや熱意をしっかりとつ。

② 資料どりを確実に行う。（これがポイント！）

教師側は、授業ごとのねらい、授業の流れなどは記録に残しておきたい。また、子どもの姿や意識の記録を丁寧に蓄積する。

実践中においても、子どもをとらえ続けることは重要になってくる。子どもが夢中になっていること、どんなことにつまずいているのか、どうなりたいのかをとらえ続けることで、子どもを一層伸ばすための具体的な手立てが見えてくる。

4 教育実践論文の書き方

(1) 一般的な形式・・・序論5～10%、本論80～85%、結論10～15%であることが多い

が、「形式はこうでなくてはならない」というものがあるわけではない。

子どもの変容がどう読み手に伝わるかが重要である。

(2) 内容・・・①主題、②はじめに（主題設定の理由や目指す子ども像など）、③研究目標や方法、

④研究内容（実践と考察）、⑤まとめや課題、⑥引用文献

(3) よりよい論文にしていくために

- 子どもの成長を願う教師の熱意が伝わるか。
- 子どもの学び、見方、考え方、感じ方を全面に出し、一人一人を大切に作る姿勢があるか。
- 子どもの成長をきめ細かく追跡しているか。
- 資料をもとに仮説の妥当性、手立ての有効性が検証されているか。
- 論旨が明確で、一貫した論文になっているか。
- 創造的な研究がなされているか。
- 明確な表現、表記であるか。

算数・数学部以外の先生方も含め、行事前のお忙しい時期にも関わらず、40名を超える先生方に参加していただきました。塚谷先生のお話から、論文の書き方ということの前に、目の前の一人一人の子どもに願いをかけ、それをまとめておくことが、よりよい授業づくりのために有効な手段であるということ改めて感じる事ができました。 <矢作北中学校 橋本 祥太>